

## 執筆者紹介

に<sup>つ</sup>た<sup>た</sup> 新田 <sup>しづ</sup> 滋 本学経済学部教授

### 〈編集後記〉

新田滋氏による「資本結合をめぐる原理論的諸問題—証券市場、株式会社、独占・寡占、資本-利子をめぐって—」をお届けする。

この重厚な論考は、宇野弘蔵の原理論と資本主義像を再考しようとするものである。周知のように宇野三段階論とは、マルクス『資本論』の論理構造を、原理論—段階論—現状分析という三層構造に仕分けをした上で、資本主義の経済構造を解明しようとするものだった。

ところで、われわれの眼に当たり前のようにある経済行為、つまり「資金を持った人物が貨幣増殖を目的に、その資金を誰かに貸し付けたり、株式会社に投資する」という経済行為を前にして、新田氏はこの経済行為を原理論の中により有機的に組み込もうと試みる。

その場合、宇野弘蔵原理論の中のいくつかの概念が再考される。たとえば、資金を誰かに貸し付けたり投資したりする「貨幣資本家」、あるいは当の投資対象たる「株式会社」概念などがその対象だ。

宇野は、資本の再生産過程外部からの「貨幣資本家」による資本貸付（例えば遺産相続でたっぷりお金を持っている人、若い頃大いに稼いで一線から退きたっぷりお金を持っている人が産業部門へ貸付をする）を、原理論の展開の中に持ち込まず、貸付資本はまずは産業あるいは機能資本家の間で遊休資本を融通しあう関係から独立したものと論じている。また「株式資本」については「貸付資本」とともに、宇野原論（流通—生産—分配論）「分配論」の中の「利子論」において論じられ、「株式会社」制度は資本主義の発展段階の末期に普及するものとして金融資本の時代に限定的に問題とされた。

これに対して新田氏によれば、これら貨幣資本家は資本主義生産の所与の前提として、株式会社論は「流通論」の中に「市場経済の自己組織化の原理」として組み込むべきだという。その結果として、新田氏は「資本家」を次のように表象する。「資本家という概念は形態的。形式的にはまずもって流通論的な次元において資本主義市場経済的な諸機構と諸観念の完成した現象形態に即して、つねに貨幣価値の増殖を志向する存在ととらえ、むしろマルクスのいう『貨幣資本家』のようなものとして措定されるべきであろう」（25頁）。もっとも評子自身は「原理論」次元では資本家とは「産業資本家」を表象するのであるが、読者はどのように考えるだろう。詳細は本稿をご覧ください。（S.M）

---

2015年11月20日発行

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

（発行者） 村上俊介

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561

---